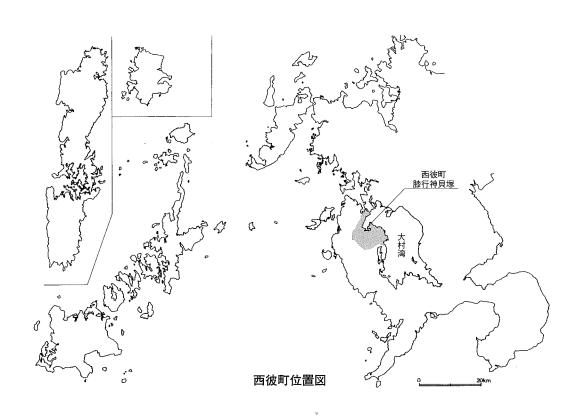
西彼町文化財調査報告書 第2集

# 膝行神具塚

2 0 0 5

長崎県西彼町教育委員会

# 膝行种具塚



2 0 0 5

長崎県西彼町教育委員会

### 発刊にあたって

この度,西彼町の歴史を物語る極めて貴重な膝行神貝塚発掘の報告書が発刊することになりました。

文化面でも相当な歴史を物語るものが存在するといわれる西彼町ですが、具体的に証明されるものがなく、何とも残念に思い続けていたのですが、あたかも西彼町が合併により西海市になることを記念するかのように、貝塚調査がなされ、かかる立派な発掘調査報告書が発刊されます。このことに対し、調査担当して頂きます県学芸文化課 本田秀樹先生をはじめとし、関係諸氏に心より感謝いたします。

過ぐる夏の暑い日,船釣りに出かけて大村湾の奥の家に帰る途中,膝行神の突っ 鼻(母衣崎)に立ち寄り、お茶の水の冷水を美味しくいただいたこと。その時、 今は亡き父親がここの歴史を楽しそうに話してくれたこと等、60年余り昔のこと が、昨日のように思い出されます。

諸遺構も検出され、12~13世紀代の頃の様子が推測されるし、西彼半島の歴史 を知る上で極めて貴重な宝物と思います。

今後,この報告書が多方面に亘る教材となり又,文化財の保護・活用に広く生かされ,西海市の文化向上に寄与されることを心より希むものであります。

平成17年3月31日

西彼町教育委員会

教育長 一瀬勝利

- 1 本書は長崎県西彼杵郡西彼町白崎郷奥河内997番地,1004番地,1010番地2に所在する膝行神貝 塚の発掘調査報告書である。
- 2 調査はJA大長崎の所有地にNPO法人が住宅建設を計画したのに伴い,範囲確認調査を平成16年1月26日~1月30日に,本発掘調査を平成16年3月8日~3月22日にかけて実施した。
- 3 調査は西彼町教育委員会が主体となり、範囲確認調査と本調査は長崎県教育庁学芸文化課が担当した。
- 4 遺構実測は西彼町教育委員会主査・渋谷恵子の協力を得て、本田秀樹が行った。
- 5 遺物実測およびトレースは本田と和田美加が行った。
- 6 本書関係の写真撮影は、調査時の遺構については本田が行い、遺物写真は山田英明の協力を得て、 本田が撮影した。
- 7 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 8 本書で用いた遺構に関する表記は次のとおりである。

SA:柵列, SB:建物跡, SK:土坑, P:ピット

- 9 本書に関する遺物・写真・図面等については、報告書刊行後は西彼町教育委員会に移管される予定である。
- 10 本書の執筆・編集は本田による。

# 本文目次

第1章	経過
第1節	調査の経過
第2節	調査組織2
第2章	遺跡の位置と環境
第1節	地理的環境4
第2節	歴史的環境
第3章	調査の方法と成果
第1節	調査の方法9
第2節	遺構 ·······12
1 据	語立柱建物跡(SB01~05)
2 ±	坑(SK01) ·········15
3 5	ピット (P6)15
4 相	冊列(SA01) ······16
第3節	·
1 ±	上器・陶磁器類·······17
2 消	骨石製品······19
A-E 4 E	20.

# 挿 図 目 次

	西彼町位置図とびら
第1図	遺跡位置図① (s=1/25,000)
第2図	遺跡位置図②(s=1/5,000)2
第3図	遺跡位置図③(s=1/2,000)
第4図	西彼杵半島北部地質図4
第5図	西彼町内遺跡出土遺物( $1\sim 4$ は $s=2/3$ , $5\sim 10$ は $s=1/3$ )
第6図	西彼町内の遺跡(s=1/80,000) ·······7
第7図	試掘坑及び本調査区位置図(s=1/400) ····· 9
第8図	本調査区平面図(s=1/100) ······10
第9図	掘立柱建物跡(SB01·02)(s= 1/40) ······11
第10図	掘立柱建物跡 (SB03 · 04 · 05) (s= 1/40) ·······13
第11図	土坑(SK01)(s=1/20) ······14
第12図	ピット (P6) (s=1/10) ······15
第13図	土坑 (SK01)・ピット (P6) 位置図 (s=1/20)15
第14図	柵列 (SA01) (s= 1/40) ······16
第15図	土器・陶磁器類(s=1/3) ······17
第16図	滑石製品①(s=1/4) ······18
第17図	滑石製品②(s=1/2) ······19
第18図	西彼町内の石鍋製作所跡等分布図21

# 表 目 次

第1表	西彼町内の遺跡一覧
第2表	掘立柱建物跡計測表12
第3表	西彼町内の石鍋製作所跡等一覧表20

# 図 版 目 次

図版 1 …		25
		膝行神貝塚遠景 2 調査区全景① 3 調査区全景②
図版 2 …		26
		調査区近景 2 ピット (P16) 検出状況 3 ピット (P15) 検出状況
図版 3 …		2 <sup>r</sup>
	1	土坑(SK01)検出状況① 2 土坑(SK01)検出状況②
	3	ピット (P6) 検出状況
図版 4 …	••••	2
		調査風景① 2 調査風景② 3 調査風景③
図版 5 …		2
	出_	造物①
図版 6・		3
	出	- 遺物②
図版 7・		3
	出:	<u>:遺物③</u>
図版 8・		3
	1	椎野大膳の墓① 2 椎野大膳の墓② 3 椎野大神 4 春日神社
	5	御腰縣石 6 お茶の水 7 志田三郎の墓 8 「海夫道浦」銘入石塔

## 第1章 経 過

#### 第1節 調査の経過(第1~3図)

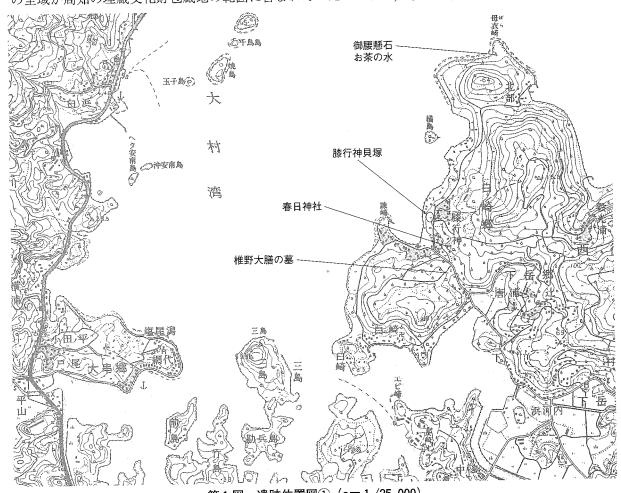
西彼町は西彼杵半島の北東部に位置し、大村湾の入江を抱くようなカギ形の町域を有する。遺跡の所在する白崎郷は西彼町の中央部にあり、大村湾に突出した半島状地形の北端部を占める。町の行政や交通上の中心である大串からは、湾を挟んで東側に望める場所にある。

ここ白崎郷奥河内膝行神に貝塚が存在することは早くから知られており、昭和5年(1930)に発見、翌年には第一回調査が行われたという。地元に残る伝承でも、大串村の荘官であった椎野大膳という人物の屋敷と墓所が膝行神にあり、正暦5年(994)に着任で訪れた大村直澄(大村氏の祖)を出迎えたと伝える。当地の北北東500~600mには直澄が休んだ「御腰懸石」や、お茶を点てた「お茶の水」といった地名も残っている。

膝行神の地名の由来については不明な点が多い。椎野大善が大善平という場所で白蛇に噛まれ、足をひきずりながら戻ったという話からきた説や、この地区に春日神社(大村氏の祖とされる藤原氏の氏神)が分社された際、京からきた尊い神様の前を往来するのに立ったままでは畏れ多いので、住民は跪いて通行したことによる説等がある。

信憑性には疑問が残るものの、当地域の有力者がこの周辺に居住していたことをうかがわせる伝承があることは、古代末期の西彼半島北部の状況を知る数少ない手掛かりとして重要であろう。

調査の発端は、JA大長崎が所有する土地にNPO法人が住宅建設を予定したことによる。計画地の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に含まれていたことから、平成15年12月8日に県学芸文化課



第1図 遺跡位置図① (s=1/25,000)

にて協議を行い、翌1月5日にはNPO法人と西彼町教育委員会も交えての協議が再度持たれた。その結果、事前調査の必要ありと判断され、平成16年1月26日~1月30日にかけて範囲確認調査(調査面積76㎡)が実施された。調査では不明土坑やピット等の遺構が検出されたほか、石鍋等の滑石製品や中国製白磁・青磁・青花磁器も出土した。一旦調査区の埋め戻しを行い、保護措置を執るべく折衝を試みたが、工事着工は避けられず、3月中に追加調査を実施することで合意に達した。本調査は建物基礎部分にあたる158.87㎡で、平成16年3月8日~3月22日にかけて実施された。その後、JA大長崎の建設計画は立ち消えとなり、調査区は元のように埋め戻されて原状復帰を行い現在に至る。

#### 第2節 調查組織

この調査は西彼町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁学芸文化課が調査を担当した。なお、この調査の関係者は次のとおりである。



— 2 —

事業主体 JA大長崎

調査主体 西彼町教育委員会 教 育 長 一瀬勝利

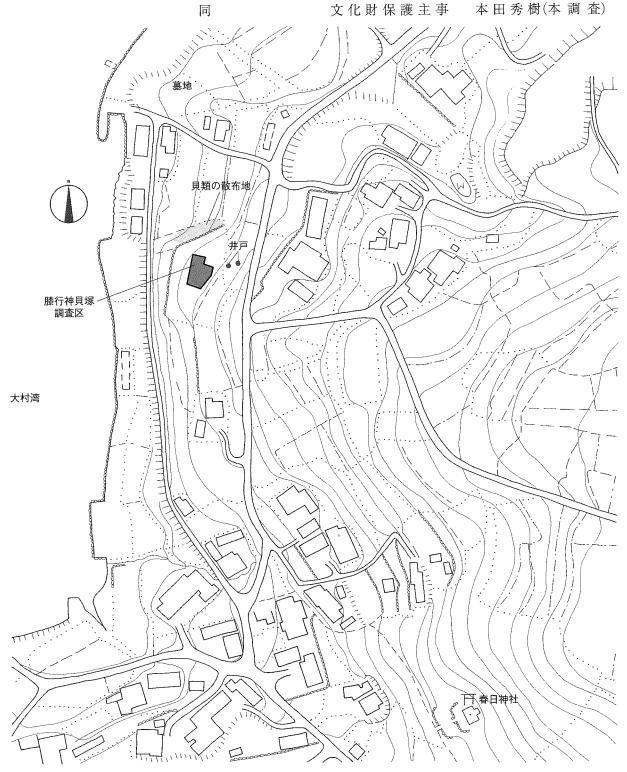
同(事務局) 教育次長 前田穂積

主 查 渋谷恵子

社会教育主事 田崎秀和

社会教育指導員 樋口すみよ

調查担当 長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班 主任文化財保護主事 村川逸朗(確認調査)



第3図 遺跡位置図③ (s=1/2,000)

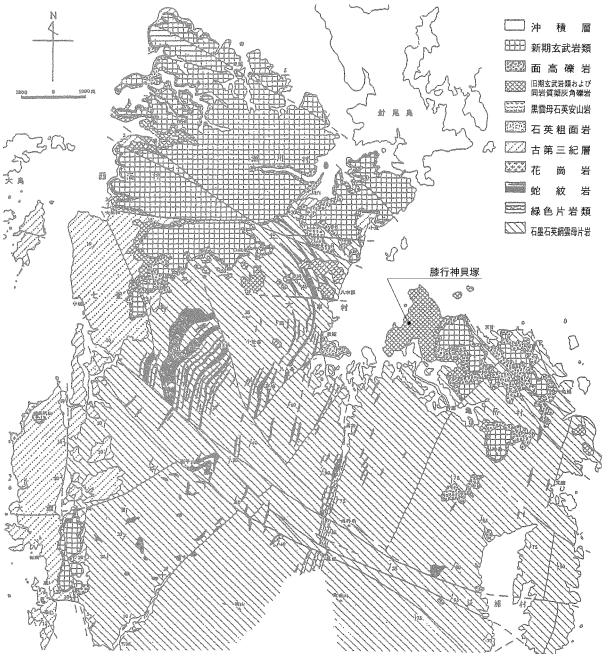
#### 第2章 遺跡の位置と環境

#### 第1節 地理的環境(第1・4図)

西彼杵郡西彼町は長崎市から北西方向にのびる西彼杵半島の北東部に位置する。町域全体では波穏 やかな内海・大村湾に面するも、最北東端は三大急流のひとつである針尾瀬戸が眼下に迫り、外海と の出入口にあたる海上交通の要所を占めている。

西彼杵半島は標高400m前後の山々が脊梁のように縦断し、半島を西岸と東岸に分断する。大部分は起伏に富んだ丘陵性地形で、河川の下流域に形成された狭小な沖積地に生活が営まれている。

西彼町では二級河川である大明寺川や鳥加川のほか、菰田川や綿打川、柚子ノ川といった小河川も



第4図 西彼杵半島北部地質図

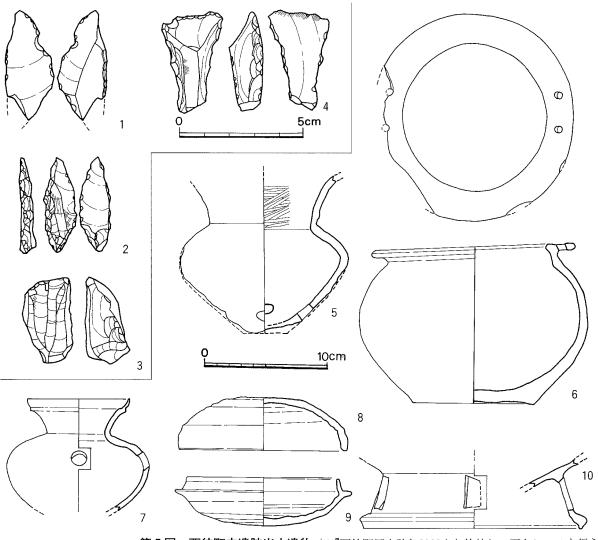
(※『西彼町郷土誌』2003より転載)

多い。また、大村湾に突き出た白崎半島や網代周辺では、複雑な海岸線と大小の島々が点在する溺れ谷地形がみえる。このような水系の発達は、人々が漁業や海運業等に生業の場を求める割合を相対的に高める結果になったのではないかと思われる。

地質的には西彼町北部の伊ノ浦・小迎,東部の白崎・宮浦・亀浦・下岳・中山・白似田の一部が第三紀層である玄武岩類で,他は所謂「西彼杵変成岩類」(長崎変成岩類)とよばれる結晶片岩類からなる。この結晶片岩に蛇紋岩が貫入した周縁には滑石,緑泥石,陽起石(緑閃石)が発達する。特に滑石や緑泥石は軟質で加工しやすいため、これらが露頭した場所には石鍋製作や採掘の跡も多く見つかっている。一方、町中西部の大串・平山では金や雲母も産出し、精錬された金は大村藩の財政に寄与したり、雲母は瓦の化粧用原料として用いられたこともあったようだ。

#### 第2節 歷史的環境(第5・6回,第1表)

西彼町内には『長崎県遺跡地図』に掲載されている周知の埋蔵文化財包蔵地が35箇所ある。数的には南隣の琴海町よりは多いが、北や西隣の西海町・大瀬戸町・外海町と比較すればやや少ない。後世になって土地の開墾等で破壊された遺跡も多々あったようで、大正から昭和初期にかけての『亀岳村郷土誌』や『長崎談叢』、『長崎縣郷土誌』には貝塚や古墳についての記載が見られる。近年、『西彼



第5図 西彼町内遺跡出土遺物(※『西彼町郷土誌』2003より抜粋し,再トレースを行う) 小迎遺跡( $1\sim4$ )(s=2/3),白浜石棺群遺跡( $5\cdot6$ )(s=1/3),江崎古墳( $7\sim10$ )(s=1/3)

町郷土誌』の編纂に際して、執筆者の下川達弥氏が町内遺跡の現状把握と採取品の整理を行ったところ、新たに5遺跡の存在を確認している。また、『日本城郭大系』に記載され、地元でも認知されながら遺跡地図に未掲載であった中世城郭4件も追加すると、第1表のような数になる。

西彼杵半島の遺跡は専ら縄文と中世・近世が主で、全体の7~8割を占めている。縄文の遺跡は殆 ど遺物包含地で、中世は石鍋関連遺跡、近世は台場や番所等が多い。これら遺跡の成因としては、当 地の地理的・地質的要素に因るところが大きいと指摘されている。

山がちで平地に乏しいこの地域は、必然的に山と海に生業の場を求めざるを得ず、縄文的な狩猟採 集経済は色濃く残ることになる。また、大村湾北部の玄武岩地帯には佐世保市針尾島や西彼町亀岳、 川棚町大崎半島といった黒曜石原産地があり、石器の原料調達が比較的容易であったことも遠因とし てあろう。一方で、西彼杵半島の地質の大部分を占める結晶片岩類は、経筒や石塔、石鍋の材料とし

第1表 西彼町内の遺跡一覧

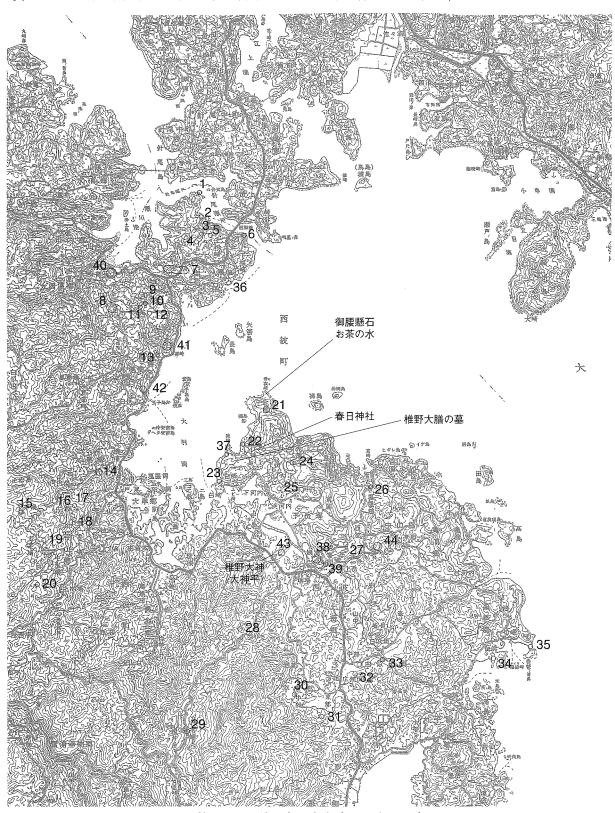
						,
番号	遺跡名称	所 在 地	種別	立地	時代	備考
1	伊ノ浦第2台場跡	西彼町伊ノ浦郷	台場跡	岬先端	近世	大村純煕が文久3年に構築した石塁
2	伊ノ浦第3台場跡	西彼町伊ノ浦郷	台場跡	岬先端	近世	大村純煕が文久3年に構築した石塁
3	伊ノ浦A遺跡	西彼町伊ノ浦郷		台地	縄文	剥片
4	伊ノ浦B遺跡	西彼町伊ノ浦郷	遺物包含地	台地	縄文	大村純煕が文久3年に構築した石塁
5	伊ノ浦C遺跡	西彼町伊ノ浦郷	遺物包含地	台地	縄文	尖頭器, 石核, 剥片
6	伊ノ浦第1台場跡	西彼町小迎郷	台場跡	岬先端	近世	
7	小迎遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	縄文	ナイフ形石器、台形石器、細石核
8	上土井行遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	先・縄	ナイフ形石器, 石鏃
9	別頭D遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	先・縄	剥片
10	別頭A遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	縄文	石鏃,剥片
11	別頭B遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	先・縄	石鏃,剥片
12	別頭C遺跡	西彼町小迎郷	遺物包含地	丘陵	先・縄	ナイフ形石器, 石鏃
13	ヤボサ遺跡	西彼町八木原郷	城跡·遺物包含地	台地	縄・中	山城の空堀や土塁が残存、剥片
14	小田ノ平遺跡	西彼町大串郷	石鍋製作跡	丘陵	中世	石鍋片多数散布
15	下茅場遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	平・中	
16	ツル掛第2遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	中世	幅20m, 高さ7mで大規模
17	ツル掛第1遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	平・中	石鍋片
18	上大平遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	中・近	
19	上茅場遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	平・中	
20	山内遺跡	西彼町平山郷	石鍋製作跡	山地	平・中	
21	白崎遺跡	西彼町白崎郷	遺物包含地	丘陵	縄文	石斧, 石匙, 石鏃, 剥片
22	<b>膝行神貝塚</b>	西彼町白崎郷	貝塚	丘陵	中世	青磁,白磁,石鍋,石鏃等
23	白崎遺跡	西彼町白崎郷	遺物包含地	岬中央	縄文	石斧, 石鏃, 剥片, 凹石, 青磁等
24	土財の辻遺跡	西彼町下岳郷	遺物包含地	丘陵	縄文	石鏃, 剥片
25	下河内遺跡	西彼町下岳郷	遺物包含地	丘陵	縄文	
26	塩屋越遺跡	西彼町宮浦郷	遺物包含地	山裾	縄文	剥片
27	明喜田遺跡	西彼町上岳郷	遺物包含地	丘陵	縄文	剥片
28	ナベシ谷遺跡	西彼町喰場郷	石鍋製作跡	台地	中・近	石鍋片
29	川山木遺跡	西彼町喰場郷	石鍋製作跡	山地	平・中	
30	西彼町のキリシタン墓碑	西彼町平原郷	キリシタン墓碑	平地	近世	県指定2基,慶長18年7月1日の銘
31	滑石遺跡	西彼町平原郷	石鍋製作跡	台地	平・中	
32	峰口遺跡	西彼町白似田郷	遺物包含地	山裾	縄文	剥片
33	白似田上遺跡	西彼町白似田郷	遺物包含地	丘陵	縄文	剥片
34	白浜石棺群	西彼町風早鄉	墳墓	丘陵	弥生	畑の耕作中に出土, 弥生土器 (壺)
35	琵琶ノ首鼻遺跡	西彼町風早郷	遺物包含地	砂浜	縄文	細石器
36	瀬ノ脇遺跡 (※1)	西彼町小迎鄉		_	_	弥生土器, 黒曜石
37	諫崎遺跡 (※1)	西彼町白崎郷	遺物包含地			黒曜石
38	上岳神社遺跡 (※1)	西彼町上岳郷	墳墓		弥生	
39	江崎古墳 (※1)	西彼町上岳郷	古墳		古墳	須恵器, 土師器, 陶質土器
40	皆割石遺跡 (※1)	西彼町八木原郷	遺物包含地	丘陵	弥生	弥生土器,石鏃,掻器
41	城明城跡 (※2)	西彼町八木原郷	城跡	_	中世	
42	刎木城跡 (※2)	西彼町八木原郷	城跡		中世	本丸,石垣他と記載
43	八幡山城跡 (※2)	西彼町喰場郷	城跡		中世	本丸, 石垣他と記載
44	城の尾城跡 (※2)	西彼町上岳郷	城跡		中世	
<u>** 1</u>	「西彼町郷土誌」に記載のある					· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

<sup>※1 『</sup>西彼町郷土誌』に記載のあるもの

<sup>※2 『</sup>日本城郭大系』に記載のあるもの

て注目され、中世期における流通商品の一つに数えられた。これらの物資の運搬には「海夫」と称される集団が関与していたであろうと推測されている。

西彼町内の遺跡を概観してみると、針尾瀬戸に面した町境の伊ノ浦郷では台場跡があり、玄武岩地質の小迎郷や白崎半島の白崎・下岳・宮浦・中山・亀浦の各郷では縄文が、大串・平山・鳥加といっ



第6図 西彼町内の遺跡 (s=1/80,000)

た町中央部では中世の石鍋生産に関わる遺跡が占め、地域差が歴然として存在する。

代表的な遺跡をいくつか紹介すると、小迎遺跡(7)は標高50~70の丘陵上にある遺跡で、縄文の 掻器類や石鏃の他、旧石器時代のナイフ形石器や台形石器、細石器の採集(第5図1~4)が報告されている。弥生時代の遺跡は稀少であるが、平成8年に報告のあった白浜石棺群(34)があげられよう。大村湾を見下ろす丘陵部にあり、畑の開墾中に石棺が発見され、内部には小形壺が副葬されていたという(第5図5・6)。昭和40年代にも同様の報告は見え、基数不明ながら弥生中期の墓地が形成されていたことがわかる。海に突出したトンボロ状地形に立地する諌崎遺跡(37)は、昭和41年に開墾されるまでは墳墓状のものがあり、長さ130cm、幅60cmに組まれた石の上に平石が被せてあったと伝える。遺物の出土はなく時期不明ながら、石棺墓の可能性は高い。この他に上岳神社遺跡(38)でも弥生墳墓の存在を指摘する話はある。

古墳は今では希有な存在であるが、過去の文献には記載が残る。『長崎縣郷土誌』亀岳村の項には、白似田古墳(白似田郷字猫塚)・平原古墳(平原郷字杖塚)・上岳古墳(上岳郷字カニ塚)の名が見え、喰場郷中島や白崎郷膝行神にも円墳が存在したといわれれるものの、所在等定かではない。唯一確実視されるのは江崎古墳(39)である。亀岳中学校建設の際に破壊された現場が目撃され、結晶片岩の板石で構築された竪穴式石室を有する古墳であったという。町に保管された副葬品(第5図7~10)から、5~6世紀の年代観が考えられている。

古代になると遺跡として認識されるものは皆無で、『肥前風土記』の記述が知られる。景行天皇が神代直を彼杵郡速来村(現在の佐世保市早岐)に派遣して土蜘蛛を捕らえさせたところ、速来津姫の弟健津三問が石上の神の木蓮子玉という白珠を献上したことから、具足玉の国と称され、後に転訛して「彼杵郡」と呼ぶようになったと記す。また、鰒の加工品等海産物の貢納が求められたことで、贄人として認識されたようでもある。平安末期には松浦地方に宇野御厨が成立するとともに、彼杵郡には彼杵荘が置かれるようになった。

中世では第4章でふれる石鍋製作所跡を除くと、膝行神貝塚(22)と城館跡があげられる。当町の在地土豪として八木原氏の名が見え、鎌倉時代に八木原備中入道祐法が地頭職に補任されたことがわかる。八木原氏は外海中浦方と領地争いを繰り広げながらも、永禄年間には大村純忠の勢力下に組み込まれることになる。城明城跡(41)は由緒不明で、刎木城跡(42)は八木原氏の家臣・志田儀憲の居城と『大村郷村記』にあり、いずれも八木原氏に関わりの深い城跡であることは間違いなかろう。

この他,大明寺川とその支流には八幡山城跡 (43) や城の尾城跡 (44),室町時代初期に創建された真言宗寺院・白栄山泉浄寺跡がある。大明寺川流域は西彼町でも数少ない弥生~古墳期の遺跡があるところで,小規模ながらも一定の生産基盤を有していたと推測されることから,中核的集落が営まれていた可能性もあり,注目していきたい。

以上、西彼町の中世までの歴史的環境を概観してきたが、各時代ごとに歴史上の重心が移動しているという感がある。津々浦々で継続的な生活の営みを追い求めることが困難であることは、裏を返せば、海に基盤を置く民のしたたかさな生き様が垣間見えるようにも思えるのである。

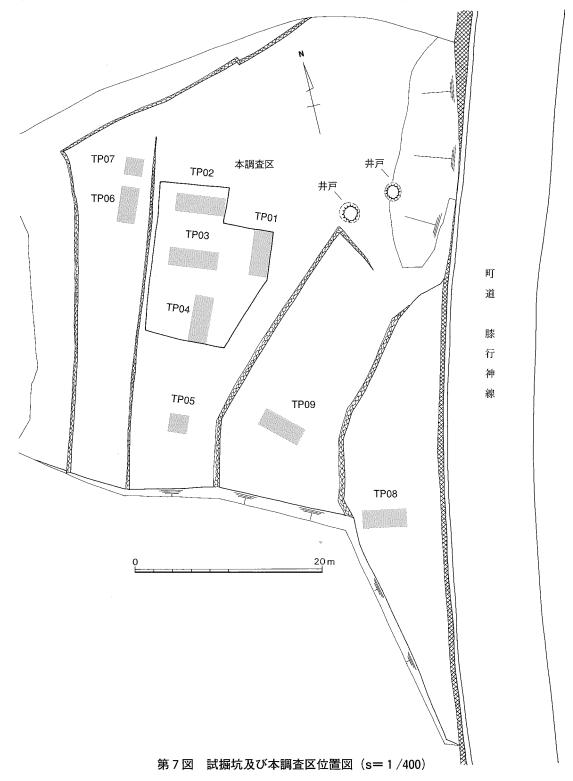
#### (参考文献)

- ·西彼町教育委員会編 2004 『西彼町郷土誌』
- ・長崎県史談会編 1973 『長崎縣郷土誌』(1933初刊)
- ・平凡社地方資料センター編 2000 『長崎県の地名』日本歴史地名大系 平凡社

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法(第7図)

膝行神貝塚は丘陵西側の緩斜面にあり、標高は $12\sim13$ mを測る。斜面は四段に造成され畑地として利用されていたようだが、現在は荒れ地となっている。確認調査の試掘坑(以下、TPと記す)は、この畑地の下から二段目を中心に設定された。ここは建物の中心施設が建設される予定地であることから、 $2 \text{ m} \times 5 \text{ m}$  (TP0 $1\sim04$ ) と $2 \text{ m} \times 2 \text{ m}$  (TP05) を計5 箇所設け、最下段に $2 \text{ m} \times 4 \text{ m}$  (TP06)

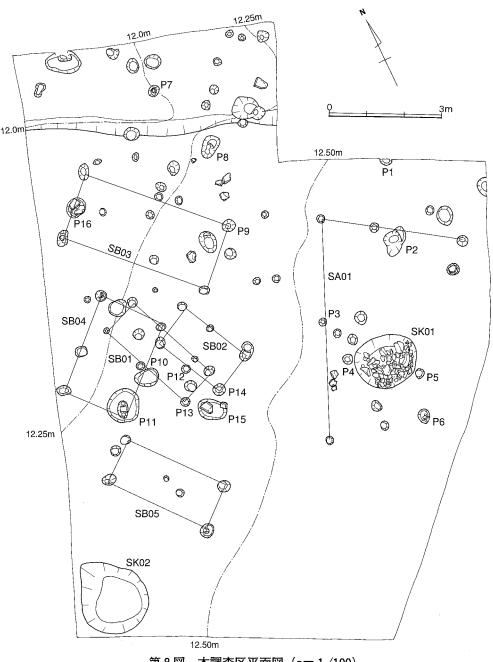


と 2 m×2 m(TP07)の 2 箇所,上の二段にはそれぞれ 2 m×5 m(TP08・09)を 1 箇所ずつ設定して調査が行われた。

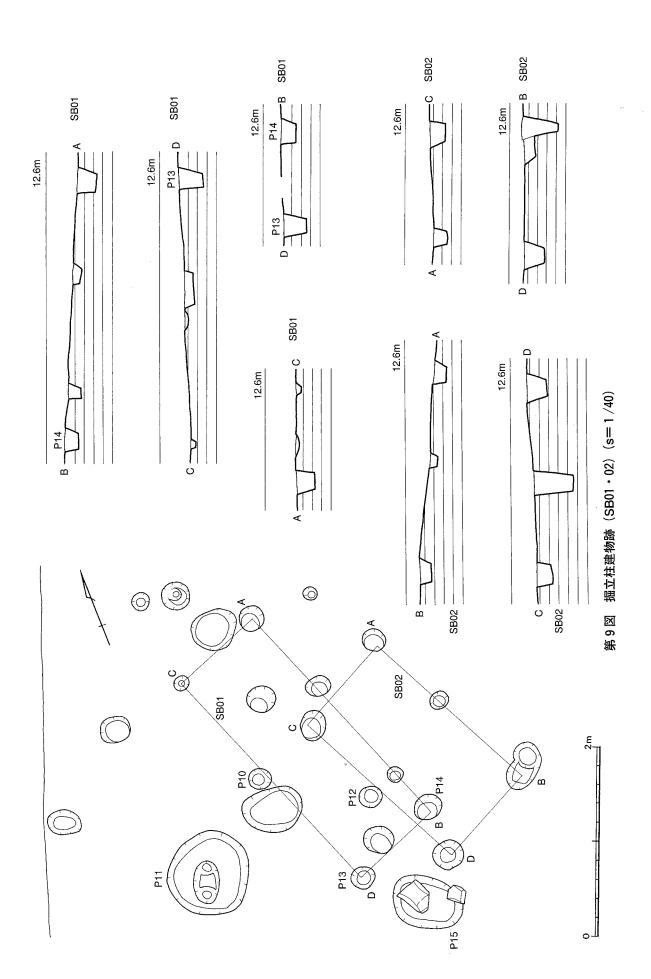
調査は、TP01~04では表土を10~15cm剥いだ時点で赤褐色粘質土の基盤層(地山)が現れ、ピット等が掘込まれている様相がみられた。TP06は貝塚の残滓物とおぼしき貝類の出土はあったようだが、その他に遺構・遺物はなかった。TP07~09からは遺構や遺物は全く確認されていない。結果的に、表土に遺物が混入し、遺構からも滑石製石鍋片や青磁・白磁が出土するTP01~04の範囲については、本調査を実施する必要があると判断された。

本調査は建物の基礎部分にあたる158.87㎡(確認調査時の40㎡を含む)について実施した。膝行神 貝塚全体の総発掘調査面積は、本調査に至らなかった TP まで合わせると194.87㎡になる。

調査区はほとんど平坦地に近く,緩やかに北西側に傾斜する程度である。遺構検出面の標高は12.0  $\sim$ 12.5 m を 測る。



第8図 本調査区平面図 (s=1/100)



#### 第2節 遺 構(第8~13図)

今回の調査で確認された主な遺構は、掘立柱建物跡(SB01 $\sim$ 05) 5 棟、土坑(SK01 $\cdot$ 02) 2 基、ピット(P1 $\sim$ P16/遺物が出土したピットのみ番号を付した) 86基、柵列(SA01) 1 基である (第8図)。

調査区の北端部は一段下がり、遺物もある程度まとまって出土したが、明確に遺構と断定するには 至らなかった。この浅い段を東に延長すると井戸跡につながる可能性はあるものの、ひとまず判断を 保留しておきたい。

南側で遺構密度が薄くなっているのは後世に畑の開削を受けたためであろう。北西側では遺構検出 面の直上で石鍋片や土師皿が出土しているので、ここまでは削平が及んでいなかったと考える。以下、 各遺構ごとに説明を加えていくことにする。

#### **1 掘立柱建物跡 (SB01~05)** (第9·10図, 第2表)

掘立柱建物跡は調査区のほぼ中央に集中する。柱穴の大きさや間隔に不規則なものが多く、確実に 建物跡といえるものはあまりない。調査中はどこに建物が建つのか全く見当がつかなかった。平面図 作成後、図上で復元した5棟についてここでは記す。

掘立柱建物跡の主軸方位からすると、北北西にとるもの $(SB01\cdot02)$ と北西ないし北東方向をとるもの $(SB03\cdot04\cdot05)$ の、2つのパターンが見て取れる。建物の構造は2間×1間の細長いものが主流をなし、等高線とは直交して建つ。海側を一斉に見下ろすような建物配置ではなく、北西方向からの視線を遮るような、あるいは海からの風を防ぐような意識が働いているようにも思える。このことは、建物規模もさることながら、本来屋敷や住まいとして建てられたものではないことを何わせる。

#### 掘立柱建物跡(SB01)(第9図)

主軸を北北西方向にとる 2 間× 1 間の建物跡である。梁行が 1 m しかないため,細長い建物構造をとる。桁行方向の柱は 2 本と 1 本があり,一定しない。簡易な作業スペースといった程度か。P10からは中国北宋代の白磁が,P13では土師質土器(第14図23),P14は炭化物が出土している。

#### **掘立柱建物跡(SB02**)(第9図)

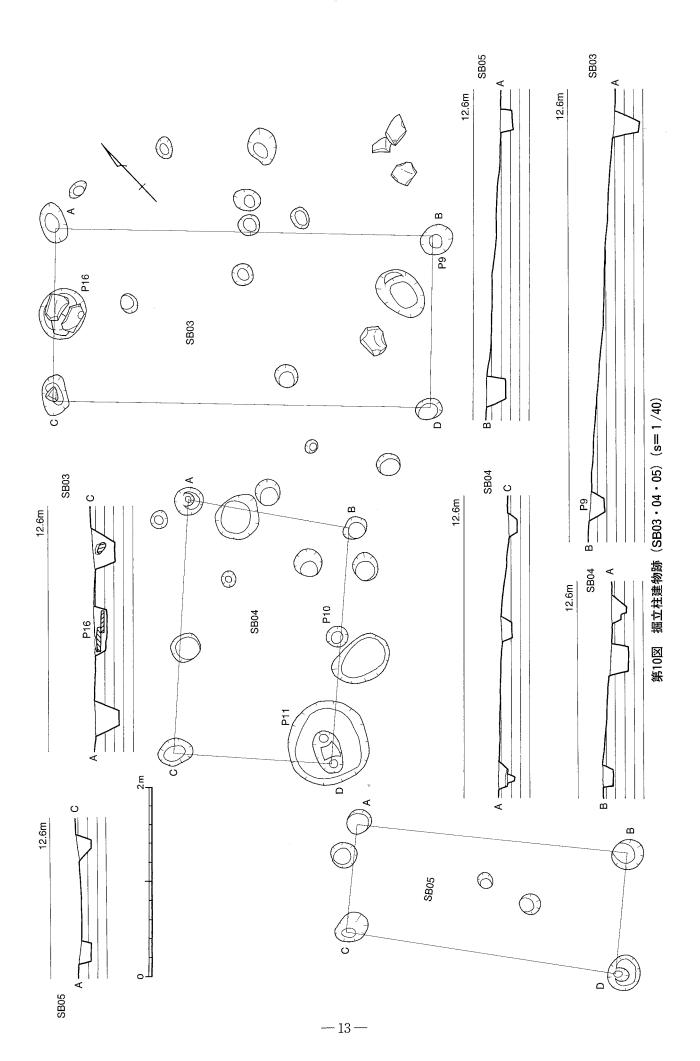
SB01に近似した主軸方位をとる建物跡である。梁行は同じ1mで、桁行はSB01より短い。桁行の柱の通りはよいが、建物規模としては5棟中で最も小さい。こちらも簡易な構造の建物としかいいようがない。P12からは石鍋片が出土している。

#### **掘立柱建物跡(SB03**)(第10図)

SB03は5棟の建物跡の中では最も広い床面積をもつ。主軸はSB01・02よりもさらに西に振れ、北西方向をとる。梁行1.8m(6尺)は、ちょうど1間でおさまりがよい。問題は桁行で、実長で4 m はやや長すぎるきらいがある。建物構造は1間×1間であるが、桁行は最低でも2間はほしいところであろう。P9では中国製の白磁が出土している。

遺構番号	規模	+ 14	桁	行	梁	行	方位	床面積
	况 保	方 向	実 長	柱間寸法	実 長	柱間寸法	方 位	
SB01	2間×1間	北北西	2.8m(9尺3寸)	6尺·3尺3寸	1.0m(3尺3寸)	3尺3寸	N22° W	2.80m <sup>2</sup>
SB02	2間×1間	北北西	2.1m(7尺)	4尺・3尺	1.0m(3尺3寸)	3尺3寸	N28° W	2.10m <sup>2</sup>
SB03	1間×1間	北西	4.0m(13尺3寸)	13尺 3 寸	1.8m(6尺)	6尺	N46° W	7.20m²
SB04	2間×1間	北東	2.7m(9尺)	4尺・5尺	1.8m(6尺)	6尺	N47° E	4.86m²
SB05	1間×1間	北西	2.9m(9尺6寸)	9尺6寸	1.2m(4尺)	4尺	N42° W	3.48m²

第2表 掘立柱建物跡計測表

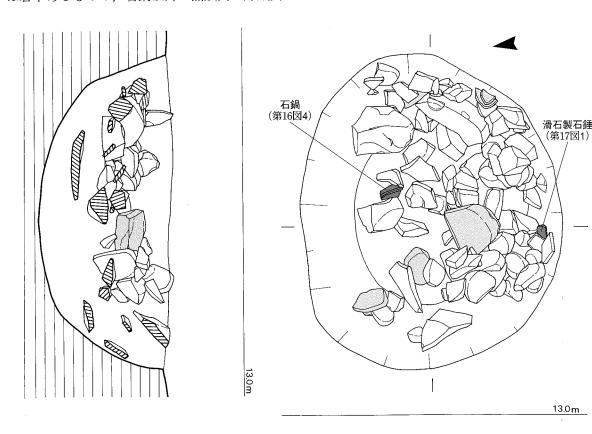


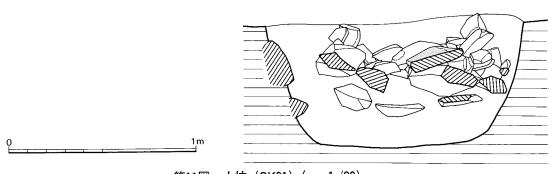
#### 掘立柱建物跡 (SB04) (第10図)

調査で確認された建物跡は基本的に北西から南東方向の主軸をとるものが多いが,この SB04だけは対照的に主軸方位を北東にとる掘立柱建物跡である。梁行はいびつながらも $1.8m(6\,\mathbb{R})$ を測り, 1間におさまる。桁行は実長 $2.7m(9\,\mathbb{R})$ で,柱間は一定しないものの柱通りはよい。遺物は P10から中国の白磁が,P11の表層から近世陶磁器と黒曜石が出土している。

#### 掘立柱建物跡 (SB05) (第10図)

SB05は SB03と同規格で、70%ほど規模を縮小させた建物跡である。主軸方向も北西で、ほぼ似通っている。梁行1.2m(4尺)を測り、桁行は2.9m(9尺6寸)とやや長い。SB03と SB05は同時期か、近接した時期に建てられたものであろう。いずれにしろ、屋敷や館を思わせるほどの構造物ではなく、粗末で簡易な小屋か作業用施設のようなものではなかろうか。建物周辺からは、一般的な供膳具の類は若干あるものの、石鍋以外の煮炊具と貯蔵具はほとんど出土していない。





第11図 土坑 (SK01) (s=1/20)

※うすいアミカケは結晶片岩を示す

#### 2 土坑 (SK01·02) (第11·13図)

調査区の中央東寄りと南西端にそれぞれ土坑(SK01)と土坑(SK02)を検出した。ただし、土坑 (SK02) は平面や底面の形状が不明確で、覆土にも木根や近現代の陶磁器等も混入することから、 芋穴のようなものと思われる。ここでは土坑 (SK01) のみ報告する。

#### 土坑 (SK01) (第11図)

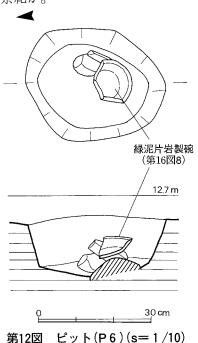
平面は楕円形を呈し、長径1.67m、短径1.38m、深さ0.78mを測る。主軸はほぼ東西方向をとる。 掘り込みは垂直に近く、断面はU字形をなす。底面は平坦にならず、中央部が窪むようになる。

内部からは拳大~人頭大の玄武岩や結晶片岩,石英の結晶が投げ込まれたような状態で見つかった。 土坑の上~中位には大きめの石材が多く,下位では拳大の塊石が多いようである。ただ,底面付近に ある石は少なく,ある程度底が埋没した後に一気に投棄されたのではないかと思われる。石は土坑の 南東方向に偏在する傾向にあり,こちら側から廃棄されたのであろう。石鍋片(第16図 4)や滑石製 石錘(第17図 1)もこれらに混じって出土した。

#### 3 ピット (P6) (第12·13図)

ピットは調査区全体で86基を 検出し、遺物が出土した16基に ついては $P1\sim16$ の番号を付し た。ここでは特異な遺物が検出 されたP6についてのみ記す。

P6はSK01の1mほど南にあり、長径36cm、短径30cm、深さ14cmを測る。底面からやや浮いた状態で、東側に玄武岩の塊石を介して緑泥片岩の碗が出土した。SK01の廃棄行為に伴う祭祀か。

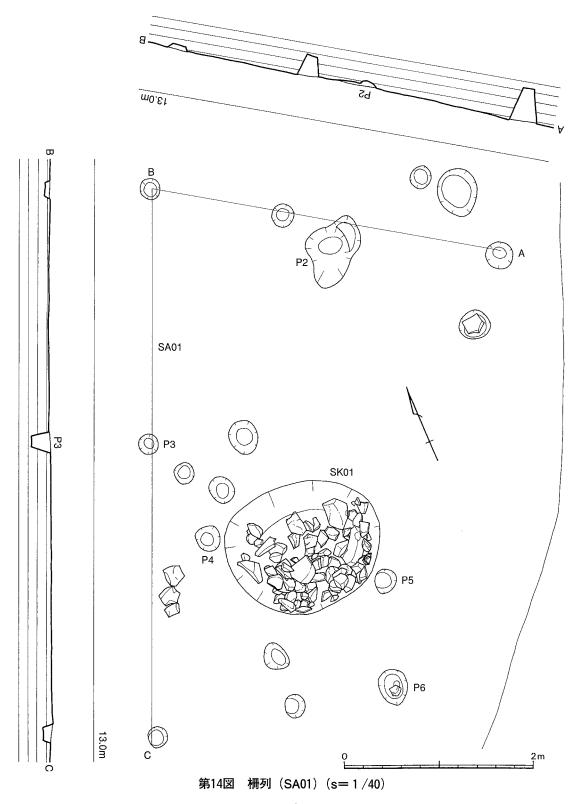




— 15 —

#### 4 柵列 (SA01) (第14図)

SK01とP6を取り囲むように、北側に柵列(SA01)を想定した。柱間は北東側が2.4m(8尺)・1.5m(5尺)、北西側は2.7m(9尺)・3.0m(10尺)と不規則である。柵列の方向も前述した掘立柱建物跡に沿うものではない。ただ、掘立柱建物跡を復元した北西側(海側)とSK01やP6のある南東側(山側)とでは、標高12.5m付近を境に遺構の連続性が途切れるようである。このことから、廃棄土坑と祭祀行為を思わせる遺構の特殊性を考慮し、遮蔽物として柵列の存在を推定しておきたい。



-16-

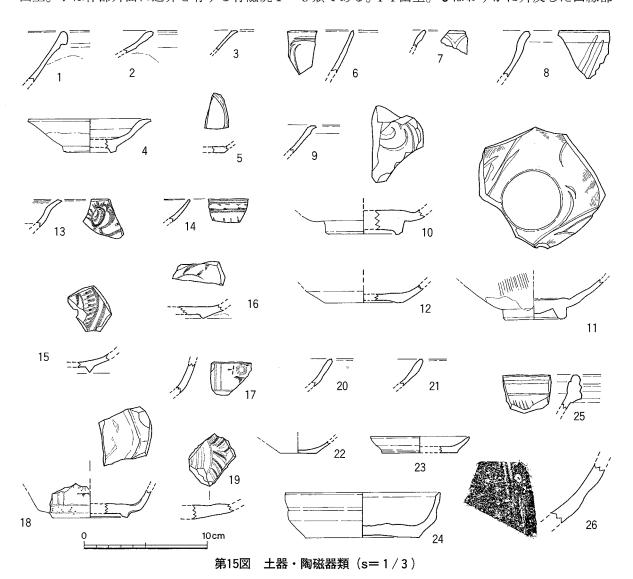
#### 第3節 遺 物(第15~17図)

遺物の約90%は表土~遺構検出上面出土で、遺構に伴う遺物は10%にすぎない。ここでは小破片であっても遺構出土の遺物を中心に記載し、その他に器種・器形が判別できるものは直接的に遺構に伴わずとも掲載した。よって特に出土地の記述がない遺物は、表土等出土の資料と判断されたい。なお、輸入陶磁器類は森田・横田氏による分類(森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』)と、小野氏分類(小野正敏1982「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』)に従った。

#### 1 土器・陶磁器類 (第14図)

1~5は白磁である。1は口縁部が玉縁状になり、体部は無釉の白磁碗Ⅳ類である。本遺跡ではこのタイプの白磁が最も多く出土している。2は体部外面が無釉になる白磁皿Ⅲ類で、P6出土。3は口縁端部が鋭い嘴状をなし、内端部は稜がつく白磁碗Ⅴ類である。調査区北西隅の段落ち部分出土。4は端反りの口縁部で、見込みは蛇ノ目釉剥される白磁皿Ⅲ類である。外面体部~底部は無釉となる。5は底部の内外面ともに施釉される白磁皿Ⅸ類である。内底部と体部の境には段がつく。

 $6\sim$ 12は青磁である。6は内面にヘラによる区画線を有する龍泉窯系青磁碗 I-4 類である。P3出土。P3は体部外面に連弁を有する青磁碗 I-5 類である。P4出土。P3はかずかに外反した口縁部



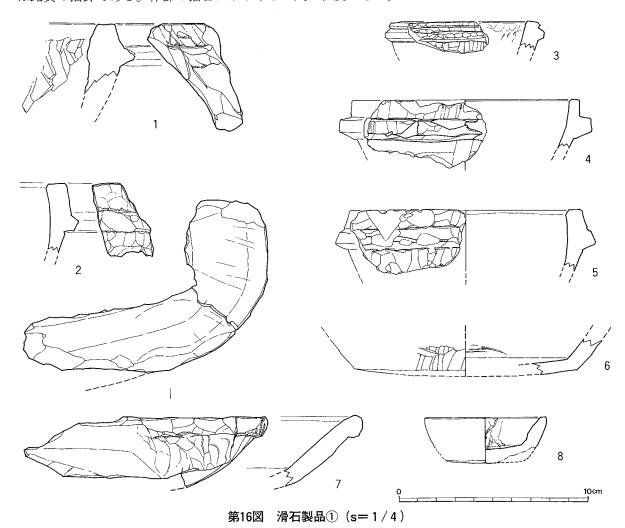
をもつ同安窯系青磁碗Ⅲ-1類である。9 も 8 と同様,口縁部が短く外反する同安窯系青磁碗Ⅲ類である。SK02出土。10は全面施釉後に高台畳付を釉剥ぎする龍泉窯系青磁碗 I − 2 類で,11は内面を櫛状工具で施文する同安窯系青磁碗Ⅲ類である。ともに調査区北西隅の段落ち部分出土。12は外底部の釉を掻き取って露胎とした,龍泉窯系青磁皿 I 類である。

 $13\sim16$ は明代の青花磁器である。13は口縁部が端反りになる小野 B 1 群の皿である。14は碁筍底となる皿 C 群の口縁部である。15は蓮子碗とよばれる C 群の底部である。16は14と同様,皿 C 群の底部である。

17~19は朝鮮陶磁である。17と18は同一個体の体部と底部であろう。八角鉢で、体部外面に白黒象 嵌を施し、内底面には浮文がみられる。高台付近には砂が付着し、畳付は胎土目跡を残す。P5出土。 19は底部内面に白黒象嵌を施した皿である。

20~24は土師質土器である。20・21は坏の口縁部か。共に体部に比べて口縁部がやや厚ぼったい。20は SK01, 21は P4 出土。22は器種不明。底部は小さく,径2.8cmを測る。全体に器壁は薄く,体部は大きく上方に開く。23は口径7.8cm,底径6.0cm,器高1.3cmの小皿である。底部は糸切り底か?。P13出土。24は口径12.2cm,底径9.0cm,器高3.6cmの坏である。底部は糸切りで,体部は中位で屈曲し口縁付近では直立気味となる。口縁部内面は面取りされる。

**25**は小振りな備前系擂鉢の口縁部である。外面に 2 条の沈線を巡らし、内面は 2 つの段がつく。 **26** は瓦質の擂鉢である。体部の擂目はかろうじて残る程度である。



— 18 —

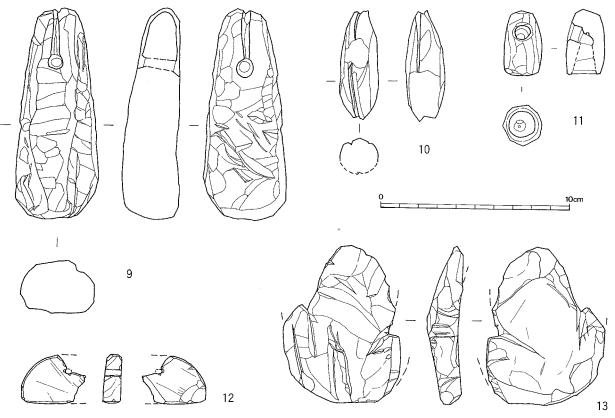
#### **2** 滑石製品(第16·17図)

 $1 \sim 6$  は石鍋である。 1 は未製品で,内外面ともに粗いノミ痕が残る。鍔は小さく断面台形をなし,口縁部も台形状をなす。 2 は断面台形の鍔はやや垂れ気味で,口縁部は断面長方形を呈す。外面にススの付着はなく,未使用品か。 3 は小形の石鍋で,断面台形の鍔が口縁部直下に取り付く。仕上げ加工が非常に丁寧に施されている。鍔から下にはススが付着する。 4 は口縁部や体部の器壁より鍔に厚みがある。鍔は断面が台形状で,体部には垂直方向に取り付く。鍔より下位ではススの付着が見られる。5 に断面三角形ないし不等辺台形の鍔がやや上向きにつく。口縁部と鍔の加工が一体となって行われていたようで,境を沈線で画する。ススの付着はない。 6 は凸レンズ状をなす石鍋の底部片である。外面にはススが付着し,体部へは大きく開く。

7は楕円形の石皿のような器形をなす。鍔と口縁部は一体化し、断面は玉縁状を呈する。外面にススが付着していることから、煮炊きに用いられたのであろう。全体のつくりは粗雑である。8は緑泥片岩製の碗である。内面は熱を受けたのか暗橙褐色を帯びる。口縁端部には赤色系の顔料も付着しているようである。体部の外面は丁寧に研磨され、ノミ痕をほとんど残さない。P6出土。

9・10は石錘である。 9は石鍋の鍔部分を転用したもので,重量は222.2gを測る。上端に穿かれた径8~9㎜の穴は擦り切り溝で結ばれる。下條信行氏のいう九州型石錘A1型に相当する。SK01出土。10は長軸方向に1条の溝を巡らすタイプである。下條氏の小型A1型で,重量は22.4gを測る。

11~13は不明滑石製品である。11は釣鐘状の形状をなし、体部と底部からそれぞれ穿かれた孔は内部でつながり、L字形に貫通する。用途は不明だが、松浦市楼楷田遺跡や大村市寿古遺跡でも同時期の出土例がある。P1出土。12は厚さ9㎜の半円形の製品に、径3㎜ほどの穿孔が施される。形状は古代の石帯に似るが、用途不明。13は短軸方向の両端に抉りを入れているようだ。石鍋の再加工品か。



第17図 滑石製品②(s=1/2)

#### 第4章 総 括(第18図, 第3表)

今回の膝行神貝塚の発掘調査では、確認調査分も含めると全部で506点の遺物が出土している。国産の土器・陶磁器類は280点で、近世陶磁器が237点、土師質土器が9点、須恵質土器が4点、瓦質土器が1点、石鍋等の滑石製品は29点という内訳になる。輸入陶磁器は207点あり、中国の青磁が136点、白磁は59点、青花磁器が7点で、朝鮮王朝陶磁も5点あった。この他には、土錘、不明金属製品、骨、粘土塊、炭化物が出土している。

近世陶磁器は46.8%と出土遺物の半数近くを占めることから,江戸期以降の開墾等により遺構面が 荒らされた可能性は高い。近世の遺物を除くと,国産の土師質土器や須恵質土器は極端に少なく,石 鍋等の滑石製品の多さが目につく程度である。それでも遺物全体の割合からすると,僅か8.3%にす ぎない。これに対して輸入陶磁器類は,全体の40.9%を占める。特に顕著なのが中国製の青磁で26.9%, 次いで白磁の11.7%の順になる。明代の青花磁器や朝鮮王朝陶磁の占める割合は少なく,遺跡の主体 をなすことはなかったようだ。遺物数量から見た遺跡のピークは,中国の青磁や白磁,石鍋等の滑石 製品が製作された12・13世紀代と考えたい。ちなみに,P13から出土した土師質土器の小皿(第15図 23)の径高指数を求めると17になり,本県の宮崎氏編年(宮崎貴夫1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会) ではⅡ期(12世紀中頃~13世紀前葉)に比定できる。

第3表 西彼町内の石鍋製作所跡等一覧表

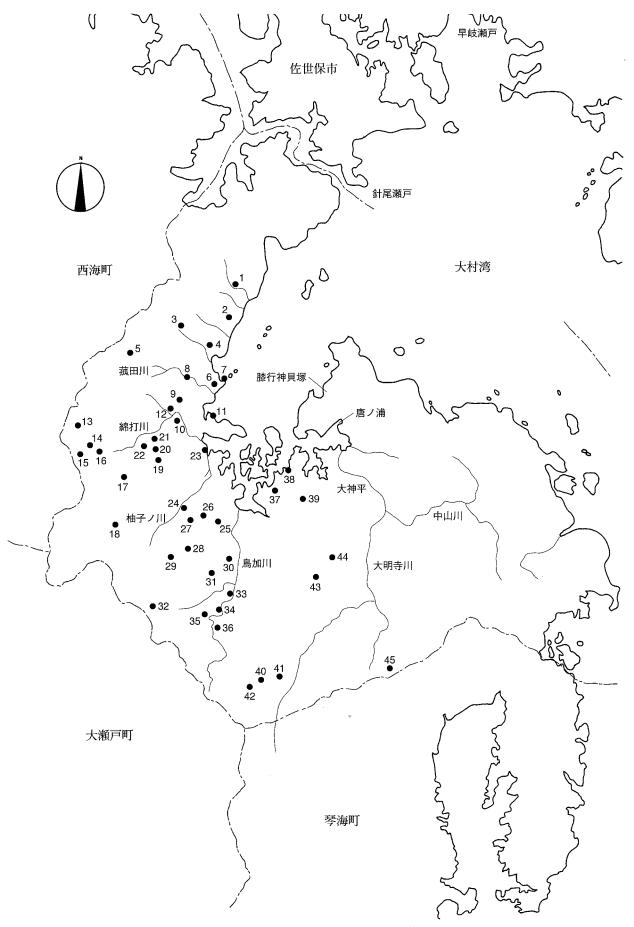
番号	名 称	所 在 地	出 典	番号	名 称	所 在 地	出 典
1	梅ノ木谷	西彼町八木原郷	文献 2	24	唐岩	西彼町鳥加郷	文献 2 · 3 · 4
2	打越	西彼町八木原郷	文献 2	25	鳴子谷	西彼町鳥加郷	文献 2
3	猪ノ子田	西彼町八木原郷	文献 2	26	湯無田	西彼町鳥加郷	文献 3 · 4
4	ナベンナ	西彼町八木原郷	文献 2	27	湯無田②	西彼町鳥加郷	文献 3 · 4
5	前平	西彼町八木原郷	文献 3 · 4	28	西之岳	西彼町鳥加郷	文献 2
6	菰立	西彼町大串郷	文献 2 · 3 · 4	29	源之丞	西彼町鳥加郷	文献 2
7	菰立②	西彼町大串郷	文献3	30	イワタン	西彼町鳥加郷	文献 3 · 4
8	ビシャゴ岩	西彼町大串郷	文献 2	31	藤之原	西彼町鳥加郷	文献 2
9	猪子見岳	西彼町大串郷	文献 2	32	猿掛木床	西彼町鳥加郷	文献 3 · 4
10	小田ノ平	西彼町大串郷	文献 1 · 2 · 3 · 4	33	大山口②	西彼町鳥加郷	文献 3 · 4
11	横浦	西彼町大串郷	文献 2 ・ 3	34	大山口	西彼町鳥加郷	文献 2 · 3 · 4
12	井手渕	西彼町大串郷	文献 2	35	野々岩	西彼町鳥加郷	文献 2
13	白岳	西彼町大串郷	文献 2	36	ウタン	西彼町鳥加郷	文献 3 ・ 4
14	二貫山	西彼町平山郷	文献 2	37	持木	西彼町鳥加郷	文献 2
15	忠五郎	西彼町平山郷	文献 2	38	湧上り	西彼町鳥加郷	文献 2
16	下茅場	西彼町平山郷	文献 1 · 2 · 3 · 4	39	金山	西彼町鳥加郷	文献 4
17	上茅場	西彼町平山郷	文献 1 · 2 · 3 · 4	40	川山木場	西彼町鳥加郷	文献1
18	山内	西彼町平山郷	文献 1・2・3・4	41	川山	西彼町喰場郷	文献 2 ・ 3 ・ 4
19	上大平	西彼町平山郷	文献1・3	42	川山②	西彼町喰場郷	文献3・4
20	八人ヶ岳	西彼町平山郷	文献 2	43	ナベシ谷	西彼町喰場郷	文献 1 · 2 · 3
21	ツル掛第1	西彼町平山郷	文献1・3・4	44	鍋石原	西彼町喰場郷	文献 4
22	ツル掛第2	西彼町平山郷	文献1・4	45	滑石	西彼町平原郷	文献 1 · 2 · 3 · 4
23	平山	西彼町平山郷	文献3・4				

文献 1 長崎県教育委員会編 1994 『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第110集

文献 2 西彼町教育委員会編 2004 『西彼町郷土誌』

文献 3 月川繁雄 『西彼杵半島石鍋紀行』

文献 4 月川繁雄 2001 『海夫道浦-石鍋が語る海の中世史』



第18図 西彼町内の石鍋製作所跡等分布図

次に石鍋について検討してみたい。分類は木戸氏分類(木戸雅寿1995「13.石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』)に依拠する。出土した石鍋を観察すると,スス等の付着がある使用品と,付着のない未使用品(製品),製作途中の未製品とに分けられる。出土した総個体数が少ないせいもあるが,とりわけ未使用品や未製品が多いという印象はない。また,確実に瘤状把手付きの石鍋(木戸 II 類)と判断されるものはなく,ほとんどが鍔付き(木戸 II 類)以降である。第16図 I ・ I は II ー I の表現。 I は II 一 I を判断されるものはなく,ほとんどが鍔付き(木戸 II 類)以降である。第16図 I ・ I は II 一 I を判断されるものはなく,ほとんどが鍔付き(木戸 II 類)以降である。第16図 I ・ I は II 一 I を判断されるものはなく,ほとんどが鍔付き(木戸 II 類)以降である。第16図 I ・ I は II 一 I を判断されるものはなく,ほとんどが鍔付き(木戸 II 類)以降である。第16図 I ・ I は II 一 I を判断される。第16図 I ・ I は II の I を引きます。 I は II の I を引きます。 I は II の I を引きます。 I を表す。 I を表

調査当初は石鍋の製作・運搬に関連した在地領主の屋敷跡という思惑から、製品の最終加工場や倉庫等の検出を期待したが、それを裏付けるような資料を得ることはできなかった。西彼町内の石鍋製作跡等の分布(第18図、第3表)をみると、結晶片岩地帯にある町西半部の八木原郷・大串郷・平山郷・鳥加郷に集中することがわかる。山間部の滑石採掘場からは水系を利用して運び出されたことはこれまでも指摘されており、本町では菰田川や綿打川、柚子ノ川や鳥加川の流域がそれに該当しよう。いずれも膝行神貝塚の前面に広がる大村湾の入江に集積されることになり、集荷管理者の居住地として地理的条件は具わっている。大正期には八木原や大串郷横浦(11)・網代から膝行神を経由し、佐世保(早岐)や大村方面と結ぶような定期航路はあったようで、物資の流通や人の往来を知る上で参考になる。また、膝行神から南東方向の入江に「唐ノ浦」という地名があり、大串金山の金鉱石をここに運んで精錬したため、買石改め等の役所や鉱山師、掘子が住み着き、飯屋や宿屋も寛文三年(1663)まであったと伝える。ともに時代を異にする話であり、憶測の域を出ないが、興味深い記事ではある。

膝行神貝塚のように盛期が12・13世紀にあり、その後急速に衰退する遺跡は県内には多い。郡川の河口近くにある大村市寿古遺跡は12世紀後半に遺物量が飛躍的に増加し、その後は激減する。中世の集落遺構の存在が考えられる東彼杵町岡遺跡でも、ピークは12世紀後半に求められる。松浦市楼楷田遺跡においても、中世は13世紀にピークを迎える。佐世保市内の採集遺物から地区毎の定性分析を行った中島氏によれば(中島恒次郎2003「肥前国西部の食器-彼杵郡・松浦郡-」『西海考古』第5号)、相浦、江上・針尾の2地区ではD期(12世紀後半~13世紀初頭)の様相が顕著であり、北松浦郡小値賀町でも同様であったと指摘している。石鍋の大量生産と期を同じくするこのような遺跡傾向については、今後も注目していく必要があろう。

膝行神の主である椎野大膳については不明な点が多く,ここで詳述するのは差し控えたいが,『西彼町郷土誌』も記すように「四位大膳」の転訛と考えられる。地元では大膳大夫ともいい,古代の律令制下では宮内省大膳職の長官が従四位下の大膳大夫に相当する。大膳職は御厨を所管し,贄人(平安後期からは供御人)に供膳や供祭のための魚菜類を貢納させる代わりに,諸国の自由通行や交易,課役免除や漁撈保障等の特権を与えたという。椎野大膳は大村湾北西域の贄人を代表して貢納を請け負った人物ではなかったろうか。それら貢納品のひとつに石鍋もあったと仮定すれば辻褄は合う。

遺構は北〜北東にかけて面的に広がりそうで、調査区外にある井戸跡の存在についても屋敷跡の関連を検討する余地がある。丘陵裾部の道路建設の際には小型の壺が出土したという話も聞く。膝行神貝塚の由来となった貝殻片は調査区北側の谷部で散見されるといい、局所的な堆積であるようだ。

# 図 版



#### 1 膝行神貝塚遠景



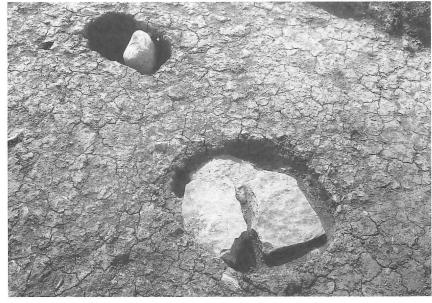
#### 2 調査区全景①



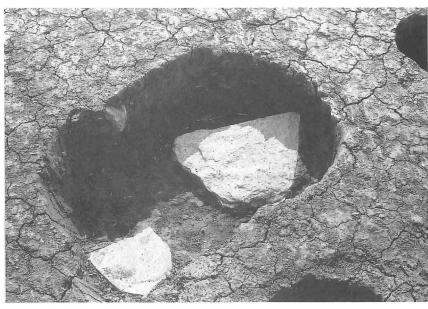
#### 図版 2



1 調査区近景



2 ピット (P16) 検出状況



3 ピット (P15) 検出状況



1 土坑 (SK01) 検出状況①



2 土坑 (SK01) 検出状況②



3 ピット (P6) 検出状況

# 図版 4



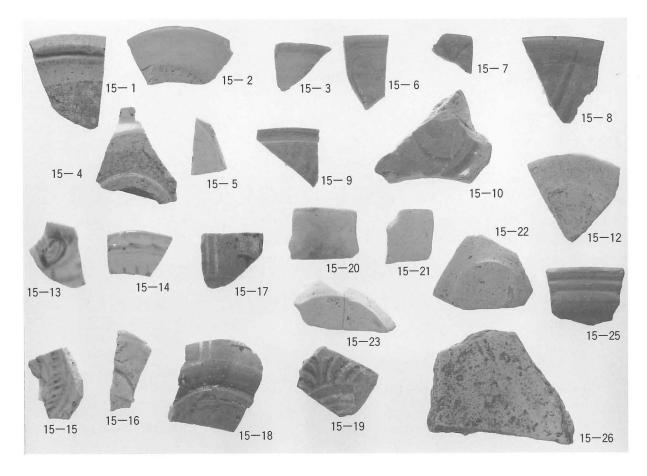
1 調査風景①

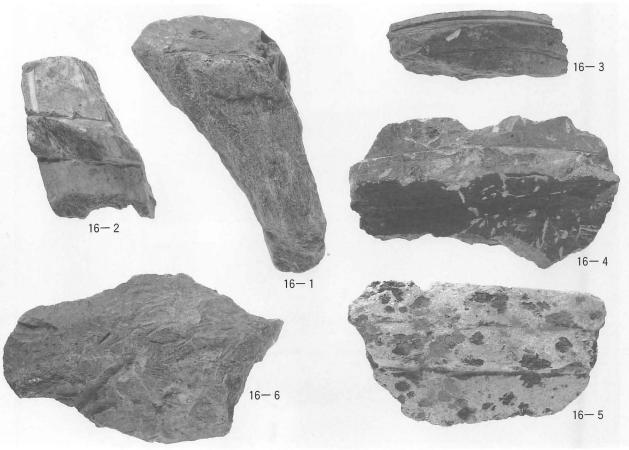


2 調査風景②



3 調査風景③





出土遺物①

# 図版 6



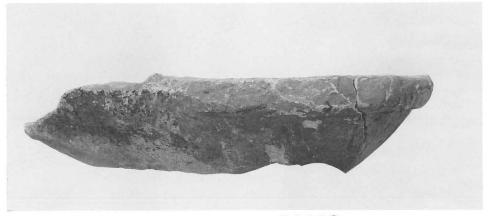
15-11



15-24

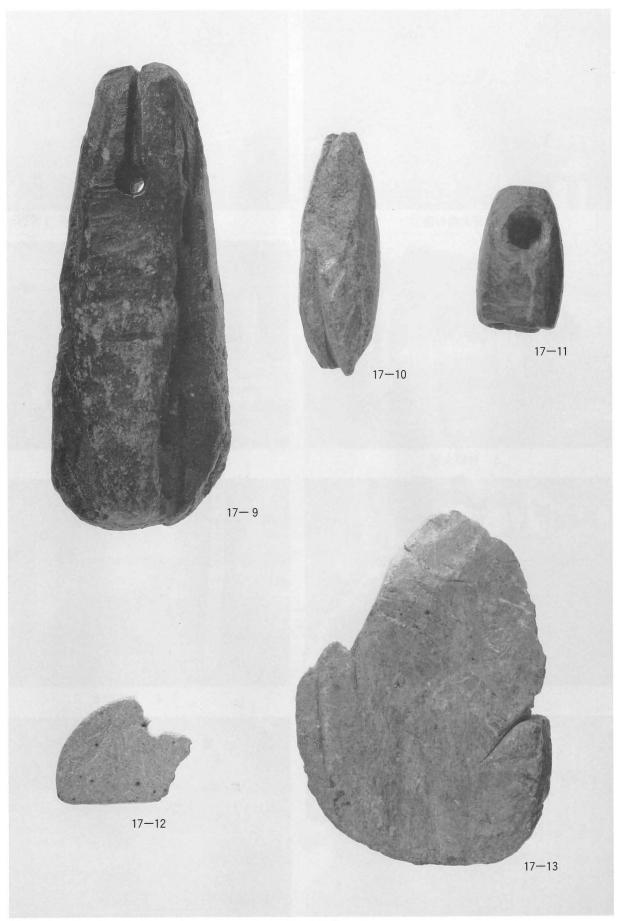


16-8



出土遺物②

16-7



出土遺物③



1 椎野大膳の墓①



2 椎野大膳の墓②



3 椎野大神



4 春日神社



5 御腰懸石



6 お茶の水



7 志田三郎の墓



8 「海夫道浦」銘入石塔

# 報告書抄録

ふりが	ない	っざり;	がみ	かいづた	),					J	
書	名	於行神	貝塚								
副書	名										
巻	次										
シリーズ	名 西	1彼町	文化	財調査幸	设告書						
シリーズ番	号 第	第2集									
編著者名	本	田秀	尌								
編集機関	- 西	<b>i</b> 彼町	教育	委員会							
所 在	地	851-3	3424	長崎県	具西彼杵郡	西彼町力	大串郷19	16-17 TEL	L0959 — 28 —	-0001	
発行年月	日 西	酒暦200	)5年	3月31日	1						
ふりがな 所収遺跡名	1.00	が ; 在 ;	な地	市町村	ー ド 遺跡番号	北緯。,"	東経。, "	調査期間	調査面積 m²	調査原因	
膝行神貝塚	ながきには、	西彼杵	-郡	42310		33°00′25″	129° 45′ 40″	20040126   20040130 20040308   20040322		住宅建設	
所収遺跡名	種	別	主	主な時代 主な遺構 主な遺物					特記事項		
膝行神貝塚	膝行神貝塚    貝塚		中世	±	掘立柱発		輸入隊	· 土師器 陶磁器 骨石製品			

# 西彼町文化財調査報告書 第2集 膝 行 神 貝 塚

平成17年3月31日

発 行 長崎県西彼町教育委員会 〒851-3424 長崎県西彼杵郡西彼町 大串郷1916-17 TEL 0959-28-0001

印刷 株式会社 昭 和 堂